れいわ ねん がつにじゅうよっか げつ れいわ ねん だいい かいそつぎょうしきこうちょうしきじ
令和7年3月24日（月）令和6年度第96回卒業式校長式辞

ことし ふゆ かんたん さ はげ ゆ もど ひより ゆ くさ
今年の冬は寒暖の差が激しく、行きつ戻りつの日和に揺さぶられながら、草
き も きせつ おとず ま ひび す き
木が萌ゆる季節の訪れをじっと待つ日々を過ごしていた気がします。ようやく、
う き おか つど ことり はる よろこ うた あたた こえ ひび
ここ鶉の木の丘に集う小鳥たちが、春の喜びを歌い、暖かな声を響かせるよ
うになってきました。

ほんじつ よ ひ おおた くなら ほんこう かいちょう ち いききょういくれんらくきょうぎ かい
本日、この佳き日に、大田区並びに本校PTA会長、地域教育連絡協議会
い いん ごらいひん みなさま ごれっせき ほんこうだい かいそつぎょうしき せいだい
委員をはじめ、御来賓の皆様御列席のもと、本校第96回卒業式をかくも盛大
きょうこう うえ よろこ ほんこうきょうしよくいん だいひょう ご
に挙行できますことは、この上ない喜びであります。本校教職員を代表し、御
らいひん みなさま あつ おんれい もう あ
来賓の皆様は厚く御礼を申し上げます。

また、これまでお子様を支え、励ましてこられました保護者の皆様、本日のお
こさま は ごそつぎょう ところ いわ もう あ ほ ごしゃ みなさま ほん
子様の晴れの御卒業を心よりお祝い申し上げます。保護者の皆様からは、本
じつ かずおお ごきょうりよく たまわ ほんこう きょういくかつどう ささ ほん
日まで数多くの御協力を賜り、本校の教育活動を支えていただきました。本
こうそつぎょうしき わか あらた ふか かんしゃ もう あ
校卒業式を迎えるにあたり、改めまして深く感謝を申し上げます。

そつぎょうせい ごそつぎょう
卒業生のみなさん、御卒業おめでとうございませう。みなさんが受け取った卒
ぎょうしゅうしょ なか か はじ お の こ しょうめいしょ
業証書は、長いコロナ禍の初めから終わりまでを乗り越えたことの証明書でも
あります。あらゆる活動が制限され、悔しい思いをしたことも多かったと思いま
す。それでもみなさんは、せんせい まな つづ きょう ひ わか
す。それでもみなさんは、先生たちと学び続け、今日の日を迎えることができました
した。今、みなさんがけんこう こんこう そつぎょうしき わか なに しあわ
です。今、みなさんが健康で、こうして卒業式を迎えられることが何よりの幸せ
です。

そつぎょうせい ねんかん ほんこう とも す しゃかい か けんがく
卒業生のみなさんとは、この1年間、本校で共に過ごしました。社会科見学
かえ なか おおごえ うた すがた く はらえき せいれつ でんしゃ ま
の帰りのバスの中で大声で歌う姿や、久が原駅のホームで整列して電車を待

すがた おぼ とうきょうしつ とつぜんつよ
つ姿をよく覚えています。とうぶ移動教室のキャンプファイヤーでは、突然強い
かぜ ふ とき ようす ひ かみ はなし き
風が吹いたそうですね。その時の様子は、火の神から話を聞きました。

そつぎょうせい ざいこうせい こころ たいいくがくしゅうはっぴょうかい おんがくかい
また、卒業生のみなさんは、在校生の心に、体育学習発表会や音楽会での
かつやく まいしゅう ぜんこうちょうかい だいひょう すがた とお さいこうがくねん
活躍、毎週の全校朝会で代表のあいさつをする姿などを通して、「最高学年
とは、こうあるものだ」という印象を確実に残してきたと感じています。卒業生の
すがた こうか かし じち こうふう
みなさん、そうしたみなさんの姿が、校歌の歌詞にある「自治の校風」として、
ざいこうせい う つ しん
在校生に受け継がれていくのだと信じます。

ほんじつさん か ざいこうせいだいひょう ねんせい そつぎょうせい は
本日参加している在校生代表としての5年生のみなさん、この卒業生の晴
すがた おぼ そつぎょうせい すがた とうさんしょう ほこ
れ姿を、よく覚えていてください。この卒業生の姿こそが、東三小の誇りであ
でんとう
り、伝統です。

そつぎょうせい でんとう すこ はな しゃかい か
さて、卒業生のみなさんに、この「伝統」について、少しお話をします。社会科
まな あすか じだい なら じだい ぜい おさ かた さだ そ
で学んだ飛鳥時代や奈良時代の税の納め方のルールとして定められた「租・
ちょう よう ちょう ひと とう じ ひとびと てづく ぬの ぜい おさ
調・庸」の「調」の一つとして、当時の人々は、手作りの布を税として納めていま
ちよう ふ ほんこう がっこうめい ちよう ふ
した。これを「調布」といいます。本校の学校名にもある「調布」です。

ほんこうしゅうへん ちめい ちよう ふ ことば つか
ところで、本校周辺の地名には、もともと調布という言葉は使われていませ
めい じ はい なづ ちめい みねむら う きむら あ
んでした。明治に入ってから名付けられた地名です。嶺村や鶉ノ木村などが合
ちよう ふ むら しょうわ じだい はい ひかしちよう ふ まち
わさって調布村となり、昭和の時代に入ってから「東調布」という町になりました。
た。

ちよう ふ ことば ちめい つか りゆう ひと た
では、なぜ、調布という言葉が地名に使われたのか。その理由の一つに、多
まがわ そんざい たまがわぞ ぬのづく さか い
摩川の存在があります。多摩川沿いでは、布作りが盛んであったと言われてい
くさ せん い ぬの かわ みず さら くさ いろ ぬ だんだん しろ
ます。草の繊維で作った布を川の水に晒すと、草の色が抜け、段々と白くなって
いくのです。この、多摩川で布を晒す仕事の様子が、同じく奈良時代に作られ
まんようしゅう のこ
た万葉集に残されています。

その和歌を詠みます。

多摩川に さらす手作り さらさらに

なにそ この児の ここだかなしき

この和歌の意味は、「多摩川に布をさらさらと晒すように、さらにさらに、この子はなんと愛らしいのだろう」というものです。

「かなしき」というのは、悲しいのではなく、ここでは、愛らしい、いとおしいという意味です。

冷たい川の水で何度も何度も布を晒す仕事をしている、その健気な、一生懸命な姿を見て、心を打たれている歌と言ってよいでしょう。

また、別の詠み方もできます。布を晒す仕事をしている本人が、段々と白くなっていく布を我が子のように愛らしいと思う、という捉え方です。

冬の冷たい水に手足を入れて布を晒す姿を想像してみてください。段々と白くなっていく布を愛らしいと思う心があるから、冬の冷たい水に触れることができる。この心を想像してみてください。

卒業生のみなさん、今は後ろを振り向かず、おうちの方が後ろにいらっしゃることを背中で感じてください。人が育つというのは、冷たい水に触れることさえ辛くない、愛らしいと思う心によって実現するのです。今日のこの日までの12年間、おうちの方は、みなさんを大事に大事にしてきました。また、この東調布の地で、地域の方々が、温かく、みなさんを見守ってくださいました。

もう一度言います。人が育つというのは、冷たい水に触れることさえ辛くない、愛らしいと思う心によって実現するのです。

そつぎょうせい
卒業生のみなさん、どうぞこれからも、^{あい}愛らしい、いとおいしいと思ってくれる周
りの大人たちを頼って、^{おとな たよ}時には甘えて、^{とき あま}そうして自分の心の布を白く、また白く
^{かがや}輝かせてください。そうしてできた真っ白な布は、^{ま しろ ぬの}どんな色にも染めることがで
きます。自分の意志で、^{じぶん いし}自分の色を、^{じぶん いろ}生き方を決められるように、^{い かた き}大人になるま
での間は、^{あいだ まわ}周りの大人を頼って自分を伸ばすことのよさを知り、^{おとな}覚えていって
ください。

ごらいひん みなさまがた
御来賓の皆様方、これからも本校卒業生を^{ほんこうそつぎょうせい あたた}温かく見守っていただきますよ
う、^{かさ ねが}重ねてお願いを申し上げます。

ほ ごしゃ みなさま あらた
保護者の皆様、改めまして、^{こさま ご そつぎょう まこと}お子様の御卒業、誠におめでとうございませ
す。
^{こさま みらい きぼう しあわ}お子様の未来に希望と幸せが多く訪れることを切に願っております。

そつぎょうせい
卒業生のみなさんが、^{ちゅうがっこうせいかつ}中学校生活をはじめ、^{こんご さら}今後も更に自分らしく活躍して
いくことを期待しています。^{ぼこう すだ}母校を巣立つみなさんの前途を祝し、^{ぜんと しゆく しきじ}式辞といたし
ます。

令和7年3月24日

大田区立東調布第三小学校長 並木 昭